

桑乾を渡る

賈

島

客舎并州已十霜

歸心日夜咸陽を憶う

端無も更に渡る桑乾の水

却て并州を望めば是れ故郷

【作者】賈 島(七七九〜八四三年)・中唐の詩人、河北省范陽(はんよう 北京)の人。字は仙(ろうせん)又は浪仙(ろうせん)。家貧しく出家して

僧侶となり、無本の名を与えられ長安の青竜寺にいた。のち韓愈に詩才を認められ還俗(げんぞく)して進士の試験を受けたが度々失敗、のち四川省長江県の主簿となり、ついで普州(ふしゅう 四川省)府の司倉參軍(しそうさんぐん)に任命されたが赴任せずして死去。推敲の逸話は有名である。又除夜の夜、年内の作詩を集め香を焚き酒を供えて祭ったという。

【語釈】\*桑 乾：山西省大同の南を東流し河北省で蘆溝河(ろこうが)に入る河の名 \*并 州：山西省太原のこと

\*咸 陽：都長安のこと(現在の陝西省咸陽市) \*無 端：思いがけなく はからずも

【通釈】并州の宿屋に十年も旅暮(たびくら)しをして、毎日長安に帰りたいと思いつけていた。この度はからずも更に桑乾河を渡つて故郷と反対の北に行くことになった。いやだと思つていた并州が十年もいたせい、今はかえつて故郷のようになつかしく思えてきた。